

弔辞

信州大学人文学部長 渡 邊 秀 夫

水野知昭先生、あなたは、去る10月23日、あなたが深く愛した信州の空が、いつになく晴れ渡り、秋の澄みきった冷気のかなた、北アルプスが真っ白に雪を頂いた、悲しいまでに美しいその日に、突然逝ってしまわれました。あまりにも無残・不条理極まりないその悲報に接し、悲嘆、痛惜の思いは尽きず、呆然としてただ天をうらみ、地に嘆くばかりです。奥様、ご子息・ご遺族の皆様のお嘆きは又いかばかりか、言い表すすべを知りません。思えば、私と水野先生との交友の機縁（えにし）は、先生が信州大学に赴任された当初に始まります。先生は、平成7年、それまで勤務されていた福島県・郡山の日本大学工学部から、信州大学人文学部・比較言語文化講座の教授として赴任なさいました。たまたまそのときの採用人事に関わった私は、早くに先生のお人柄と学問に触れることができました。その席上、なんとしてでも我が学部にお招きしたいと懇望した私どもは、あれこれの研究・教育条件に加えて、信州松本の、華やぎ移ろい行く四季折々の自然・風土環境のすばらしさまでもあげて幾重にも説得したものです（あなたと信州との絆をつないだ私が——あなたより一つ年上の私が——、今日、あなたの弔辞を読むことになろうとは、だれが想像しえたでしょうか）。その時以来、教育研究のあらゆる場面で、常に人文学のあるべき理念・理想を熱く説き、時には激し、時に柔和に、実に楽しげに「北欧神話」の精髓を語り、その学的究明から一時も目をそらすことはありませんでした。古英語や古ノルド語（古アイスランド語）、ギリシャ語・ラテン語、あるいは日本古典語にも通曉した卓越した言語感覚としなやかな洞察力をもって、広く日・欧に渡る古代神話の比較文学研究に幾多の創見を開き、我ども日本文学研究者にまで多くの教えを頂きました。その数多の著作の一部は、『生と死の北欧神話』として2002年に上梓されました。本書巻頭の序文に、「神話は単に神々あるいは英雄の話ではない。荒唐無稽または不条理とみえる語りの背後に、現に生きていた人々の世界観や壮大な思想体系がひそんでいる」「神話は、ある共同体に帰属する個々人の体験を集積したプリミティブな科学であると同時に、集団の構想力に基づいた詩学である。宇宙またわれわれの住む世界は、いかにして出来上がったか、また、太陽や月はなぜ、どのように天を駆け巡るのか。山や川、そして泉はどうしてできたか。人間という種族はどのようにして創生され、人は死ねばいずこへ行くのか。このような世界の現象や事象を説明するひとつひとつの原理が打ち立てられるところに、神話が成立してゆく」とある。著者の20数年に及ぶ深い研鑽の後に花開いた、言語学をベースにした、日本に於ける新たな北欧神話学の誕生である。学会から賞賛の誉れ高い本書は、著者にとっても記念すべき、思い出深い業績のひとつとであったと存じます——なお、本書は、奥様みずからのお手で、水野先生の胸元に抱かれるようにご遺体とともに納棺されました——。56歳という年齢は、文系の研究者にとっては、いよいよ自らの研究手法に磨きがかかり、独創性豊かな仕事の大成を迎える、学者として最も充実する年代でもあります。事実、水野さんは、近年とみに、多くの論著を立て続けに発表し、まさに文字通り充実・円熟を迎えた輝かしい時期でありました。我々はもとより、故人にとって、悔いて余り

ある、痛恨の天命の短さであったと、惜しまれてなりません。

今年6月には、我が学部を会場に、日本中世英語英文学会を主催される傍ら、今年4月から就任された全学の評議員として、又学部改革の推進役を担う副学部長として、一段と校務の厳しさの増す法人化後の国立大学行政にも、正面から取り組まれ、多事多難な局面を的確に処理し、多大の貢献をされました。先生の学生教育に寄せる熱情は、我々に教師としてのあるべき方向を指し示し、おおいなる勇気を与えて下さいました。その指針を失い、私どもの落胆・失望は計り知れません。遺された私どもは、先生が目指された人文科学の理念・理想を一層声高に、愚直に語り継ぎ、熱情溢れる教育のあるべき姿と、揺るがぬ学的良心を見失うことなく、そのご遺志を継承し、豊かに実らせる重い責務を担うことをお誓い申し上げます。

私の専門分野は日本古典文学・古典和歌の研究ですが、今年は、勅撰和歌集『古今和歌集』が編纂されて、1100年目、『新古今和歌集』が編纂されて800年目の年に当たります。記念切手の発行や各種の関連文化行事が行なわれていますが、その古典歌集『古今集』全20巻の第16巻目は、死者を悼む歌(哀傷歌34首)が収められています。業半ばにして突然逝去された水野さんの心境は、「つひに行く道とは兼ねて聞きしかど 昨日今日とは思はざりしを(人は必ず死ぬべきものと知りながら、その死が、今日・この今、我が身にふりかかろうとは思ひも寄らなかつた)」という、かの在原業平の辞世の一首に近いのではないのでしょうか。私は、その古今集の撰者紀貫之が、無二の友と死別した折に詠んだ、もう一つの歌「明日知らぬ我が身と思へど暮れぬまの 今日こそ人は悲しかりけれ(現世に残る我が身も又明日をも知れぬ、つかの間の人生ではあるけれど、そのさらにつかの間・一瞬のこの今日一日こそは、いよいよ一層、故人のことが悲しく偲ばれるのだった)」という、この和歌一首に、私の故人への尽きせぬ哀悼の心を託したいと存じます。

——明日知らぬ我が身と思へど暮れぬまの 今日こそ人は悲しかりけれ——

本日ここに、御会葬の皆様と、水野先生との最後のお別れの悲しみを共にするとともに、故人の遺徳・偉業を偲び、併せて西方浄土へのご冥福をお祈り申し上げます。

さようなら、水野さん。

私どもは、何時までも、あなたの温顔・ご鳳声を忘れません。

安らかに眠り下さい。

平成17年10月25日

葬儀委員長・信州大学人文学部長 渡邊秀夫

追記：次に掲載します論文は、水野先生がお亡くなりになる当日の夕方5時台に仕上げられた遺稿です。